Lisa, Lisa, and Lisa again: *In Dubious Battle*

鈴木実穂

序

スタインベックの小説 *In Dubious Battle*（1936）（以下 *Dubious*）は、1930 年代米国で多発した労働ストライキを題材にしている。だが、そこに登場する Lisa（リサ）という人物はストライキに全く関与せず、興味も持たない。彼女は何度も何度も登場しては、男性人物達とただ他愛のない会話を交わす。自分の赤ん坊の話、どんな男性を好ましく思うのか、牛を飼いたいという望みなど。そのような発言だけするリサは、死者が出るような争いを描く物語の中で異質(⇔同質)の存在である。それなのにリサはまた登場する。作者は何の為に繰り返し彼女を登場させるのか、一見無意味にも思えるリサに与えられた役割を検証するのが本稿の目的である。

本稿第１・２章は、小説の世界観と相容れないものに注目する。物語の中に見出せる異質さの系譜は、本能や身体欲求に対する人物達の態度に関係を持つ。発言や行動から読み取れるリサの欲求に対する態度が労働者集団や男性人物のそれと対照を成すことを明らかにし､そこに示された三者の傾向を読み取る。第三章は前章迄を踏まえ、男性人物とリサの獲得した斯様の性格の対比が比喩として、又、リサが象徴的存在として、作品の主題を補助する役割を果たしていることを論じる。

粗筋：若者ジムが共産党の入党面接を受けに行くところから小説は始まる。彼は面接官ネルソンや指導役のマックなど共産党員たちに出会う。絶望による「死んだような気持から生き返

りたい」(16)[1]というのが彼の入党動機で、ジムによれば彼は過激派の集会を偶然見物していて逮捕され、上司が身元を証言してくれなかった上、最後の家族だった母親が死に、絶望を抱いたという。獄中で初めて出会った実際の党活動員が生き生きとしていたので、「この社会システムに自分の家族全部が台無しにされた」(13)のだという結論を出し、社会の仕組みを変えようとする党活動員の仕事にのめり込んでいこうとする。マックはジムを引き連れ、檎園が点在するトーガス渓谷に向かう。低賃金に苦しむ農作物収穫の移動労働者を扇動し、ストライキを起こす為である。ある労働者集団の指導者的存在であるロンドンには義理の娘リサがおり、陣痛が始まったところだった。マックは医術の心得があるふりをして出産を取り仕切り、労働者達に団結の喜びを覚えさせる。その翌日、老人ダンが古い梯子を踏みぬいて転落し、古い梯子を使わせた事に激怒した労働者達はストライキへ突入する。ストライキを憎む土地の人が結成した自警団や、ストライキに違法性を見つけようと目を凝らす警官など、対抗勢力との戦いの数日間が描かれ、最後にジムが対抗勢力に殺されて小説は幕を閉じる。

１．憂鬱の中の無邪気、残酷の中の平穏

異質さという点に着目する時、まず小説を三つに分けて考えると便利である。最初の部分がジムの入党からトーガス渓谷への出発まで、中間部が労働者の中に潜入してストライキの下拵えをする部分、そして最後がストライキ開始から結末までである。リサがどのような存在であるかを調べる前に、まずリサの登場以前から小説の空気を乱す叙述があるということから始めたい。その叙述はリサに繋がり、彼女の役割を知るヒントになっている。それでは異質さの系譜を調べていこう。

---

[1] 本稿での *In Dubious Battle* からの引用の日本語訳は筆者によるものであり、引用のページ数は末尾に挙げた英語版による。

ジムの憂鬱から始まる最初の部分では、党員達がそれぞれの鬱積した物思いを吐露する。ジムが自分の家族に起こった不幸を度々語るのと同じく、マックも忘れ難い怒りが自分を突き動かしていることを打ち明け、又、暴行による怪我で障害を負った復員軍人ジョイの苦労の遍歴も明かされる。ネルソンもジムに、党員として生きるうちに憎しみを失っていくだろうという意味ありげな言葉を告げ、言葉の裏にある彼の暗い経験を思わせる。場面は主に事務所やアジトであり、暴力的な事件は起こらないが、各人の悶々とした物思いが断片的にリレーのように続く。しかし憂鬱な空気が支配的な中、食事の場面は誰もが楽しそうである。ジムは「干しニシンとチーズとパンを買おう。それから、明日のシチューの材料も。私の作るシチューはすごくおいしいですよ」(17)と言ってはしゃぎ、熱心に鍋の番をする。党員たちは協力して楽しげに食事の支度をし、マックは冗談を口にしながらケーキを運ぶ。憂鬱な雰囲気の合間に無邪気な喜びが点在するのが、この最初の部分である。無論人は食事をせずには生きられず、一日の間にも様々な感情を持つが、当然創作においては何が書き込まれているかを問題にしなければならない。そこで、この雰囲気の異質さがいかなる変化を見せ、今後の展開にどう関係していくのか、食事に対する態度の描写を追っていく。

中間部分では、ジムとマックの食事はシンパが経営する食堂車の食事か簡素なサンドイッチになる。食堂車では陽気な店主の様子が目立ち、又、マックが店主に協力を求めて交渉する場なので、食事に対する二人の感情は以前ほど目立たない。農園で簡素な昼食をとる様子もまだ穏やかではある。しかし労働者の苦しい生活の実態を食事の中に見た後、ジムとマックの食事の描写はもはや喜びを感じさせない。こうして食事に対する彼らの態度は、ストライキを操る態度と同じ合理的で坦々としたものに徐々に変わる。それはストライキを操る態度と徐々に同

化するということである。つまりストライキ開始の時に向かって、党員たちの食事に対する態度が無邪気な喜びという異質さを放棄していくのが中間部分である。

最後の部分、ストライキ開始から結末まで、ジムとマックは栄養摂取に重点を置き、食事に対する彼らの態度は一貫して事務的で目を引かない。目立つのは“mob”や“crowd”などの言葉で指される労働者の群れの態度で、あからさまに食事に不満や喜びを表す。そしてそのような態度は、食欲だけでなく他の身体欲求や本能欲求についても提示される[2]。彼らは闘争本能や嗜虐欲求などにも逆らわない。殴られて倒れた男を集団で蹴り続け(186)、雨で不機嫌になる。幾つもの欲求が行動原理となって労働者を野蛮な行動に駆り立てる。ジムは労働者集団のことを「まるで一つの大きな動物」(322)だと言い表すが、欲求に支配される性質も正に動物のようである。食糧が手に入ると彼らは歌い(224)目が輝き(225)「世界を支配したかのように思えて、出て行って誰かをやっつけよう」(248)という気持ちになる。欲求を満足させる彼らの態度は喜びでさえ、朗らかさの欠片もない粗暴なものである。

労働者のこの野蛮な態度は、ストライキを中心に進行する最後の部分全体の雰囲気と一致する。作者自身、複数の手紙でこの小説を「残酷な」小説だと記す（『書簡集』82)。マックたちが操るストライキは実は元々勝つ見込みの少ないストライキで、党の考えによれば将来の為の小さな捨て石である。共産党員を嫌った作者はこの小説で、共産主義と自己犠牲を担保に目的の為の犠牲を正当化する党員の身勝手さを大いに描く。しかし、扇動される労働者側も赤に騙された自分という逃げ道を確保しながらストライキに参加し、集団の陥りがちな熱狂や暴力は党員達をも脅かす。党員が警察や自警団に狙われるだけでなく、

[2] 以降、身体・本能欲求を単に欲求と言う言葉で表す。

集団内部のこのようなエゴとエゴの共存故に、とりわけストライキ開始後の *Dubious* は苛立ちと危うさに満ちている。これが残酷さの正体である。さて、つまり党員たちの楽しげな様子から始まった食事に対する態度の描写は、ストライキの準備段階で無邪気な喜びを失い、ストライキ開始後は主に労働者の複数の欲求の一つとして書かれ、すっかり異質さを放棄し、物語の描き出す残酷な状況と雰囲気を同じくする。

ストライキ開始後に特異な存在として目を引くのがリサである。リサの欲求についての叙述も多数あり、労働者と対照を成して一定の性格を獲得している。労働者達の描写は主に食べ物を得たという情報や空腹などの現実に即した‘行為’に重点が置かれ、存在＝欲望のように欲求に支配される。一方リサは願望・回想・第六感・愛情などの精神の働きを伴い、身体欲求を満たす喜びを主に‘語る’傾向にある。野営地の衛生管理を担当する医師バートンに「幸せになる為に、あなたは何が欲しい」(258)と尋ねられた時、リサは牛を飼ってバターやチーズを作りたいと答える。子供の頃父親がカップに絞り入れてくれた牛乳が「舌に温かかった」(258)という彼女の言葉は強く感覚に訴えるが、しかしこれも思い出である。つまり労働者は欲求だけを表すが、リサは欲求＋精神を表し、 その結果リサの無邪気さが強調される。この欲求と精神という枠の適用が、語義に忠実に従った「分類」と呼ぶほど截然とせず、例外もあり、しかし確かにそういう強い「傾向」が存在するのは、創作が分析から作られたのでない限り致し方ない。

リサの精神性は欲求充足自体にも付加され、授乳についてのリサの発言は欲求と精神の結びつきを最も顕著に表す。リサはジムに「お乳をやるのは心地よいから好き」だと話した後、言うべき事ではなかったから誰にも言わないで欲しいと頼む。“decent”ではないから、と彼女は言う。これは今日でも時折耳にする話題だが、いうまでもなく彼女の言う「心地よさ」の

根底には精神的充足がある。しかし普通社会生活の中では身体と精神を分けて考える傾向にある為、リサの意識は身体感覚に移ってしまい、あたかも自分が身体的快だけを求めているように錯覚し、“decent”でないと考えたのだと解釈される。猶、Abby H. P. Werlock はこの会話が、女性の養育能力を軽視し授乳を恥とする“dubious”な世間の歪みを表すと解釈する(58)。しかし本稿は、リサは我が子も含めて他者との親和性が弱く（本稿３章参照）養育能力を引き合いに出す程には母性は強調されていないと考え、世間一般とリサの対比だけに同意する。

また、ある時リサは青年党員ディックに魅力を感じてうっとりする。だが彼女は授乳の発言の他にも何度か性的放埒さを否定しており、恋心という本能が必ずしも身体的欲求を伴わないことが分かる。言い換えれば精神面に重点が置かれ、欲求＋精神という傾向に背かない。

ところで、性的要素の放棄は聖母マリアを象徴し得る適性であると同時に、リサの登場以前に次の発言をしたジムをリサに接近させる為に欠かせない。

> 「前はね、腹が立った時なんか売春宿に行ったものだった。信じられないだろ、マック。でも成長してしまうにしたがって、女の子が怖くなってしまった。多分僕は捕まるのが怖かったのだと思う。[. . .] 母や父のように捕まってしまうのが怖かった。二間のアパートに、ストーブがあってさ。」(44-45)

ジムは人が家庭の中で不幸になるそもそもの原因を生殖に帰して、女性を避けている。そのようなジムが好んで何度もリサと言葉を交わすのは、リサの態度から性的な意味を感じないからだろう。このように、目立たない形でではあるが確実に主人物ジムと脇役リサを結びつけた所に作者の意図が感じられ、二

人の関係が結末に向かって何らかの暗示をすることを予感させる。

話をリサの性格付けに戻そう。次の引用を見ると、死を予期しないリサは動物の様である。

> 「男の人たちが言っているのを聞いたわ。警官が爆弾を投げて、私たちみんな殺しちゃうんですって。」と、彼女は軽い調子で言った。
>
> ジムは困惑した。「君はそんなに怖くないみたいだね。」
>
> 「ええ。そういうのを怖いと思ったことはないのよ。」(344)

又、テントに運び込まれたジョイの死体に青ざめて怯え、老人ダンから死にゆく人間の臭いを嗅ぎ取って逃げ出そうとするのも、動物の示す態度である。逆に労働者たちはジョイの死から自分の死を連想し、死を避けようと話し合う思慮深さを持つ。しかし、生存欲求及び死の恐怖は本能でありながら精神の働きでもあるので、両者の逆転を最小限に抑えつつ、リサに野性的な感性を加えて人間離れした特殊な存在にする事を可能にしている。

リサの性格をまとめよう。第一に、リサの欲求充足は精神の働きを多分に伴って書かれる傾向にある。言い換えれば、リサの幸福は身体と精神の強い結びつきの上に成り立っている。第二に、動物的感性を持つ為、前項目と合わせると原始的という言葉がふさわしい。第三に、精神性を強調され性的意味合いが薄いので、聖母を象徴するに適格である。

同じように欲求充足を中心に描きながら野蛮な労働者と無邪気なリサという対照を可能にしているのは、欲求充足に伴われるリサの精神性であると分かる。この小説で、欲求充足に対する無邪気さはストライキに関わらない者にこそ与えられる性格なのだろう。異質さの系譜の意味はここにある。だからこそ党

員はストライキの準備段階で食事に対するはしゃいだ気持ちを放棄していかざるを得なかったのである。何故なら労働者を焚きつけてストライキを起こさせようとする彼らにとって、ストライキはその時既に始まっていたからだ。ここから、欲求に対する人物たちの態度はストライキへの関わり方によって書き分けられていると推測できる。次章はこの推測を証明する。

２．男性人物とリサの対比

前章では食事の描写を端緒に、欲求に対するリサと労働者の態度が対照を成すことを確認した。リサが異質さを引き継いだ事と、ストライキに加担しないリサがストライキに不可欠な労働者達と対照を成す事は、リサのストライキへの不関与を際立たせる。すると、ストライキを操る男性主人物達もリサと対照を成す可能性がある。リサと労働者の違いは欲求充足に伴う精神性の有無であるが、共に欲求の充足を中心に書かれる。逆に男性人物は、欲求が満たされない結果起こる弊害の方が目立つ。では、欲求に対する彼らの態度を見てみよう。

男性人物の欲求充足不足は精神に悪影響を及ぼす身体の不調として位置付けられており、頻出する「眠ったほうがいい」という発言を始めとして、男性人物達は不摂生が精神に悪影響を及ぼすことを互いに警告する。それを端的に示すのは、腰の骨を折って寝たきりになったダンがおかしな発言をした時のバートンの発言である。「人は便秘のせいで頭が馬鹿になる事があるのだよ。だが、彼はもう年だからね」(223)。医師としての彼は、便秘や老化という身体の不具合が精神に悪影響を与えると認識している。しかしこの発言に次ぐ１３章以降、マックとともにバートンも気弱になり、その背景に睡眠不足や栄養不足が置かれている。バートンが「多分私は寂しいのだ。恐ろしく寂しい」(262)と口にした後、マックはバートンを心配してジムに言う。「先生はものを食べていない。[. . .] 先生が眠るのを誰も見た

ことがない。遅かれ早かれ、彼は潰れてしまうだろう」(263)。この直後にバートンは姿をくらます。また、マックは「自分はタフだと思っていたが、お前のほうがはるかにタフだ」(273)とジムに弱音を吐き、睡眠・休養を常にマックより多くとるジムと対を成す。党員の仕事への盲信というジムの行動理念は揺らぐことなく「私は世界中で一番強い、何故なら真っ直ぐ進んでいるからだ」(280)と言ってマックに命令するに至り、逆にジムに従ってしまったマックは後にその時の自分の精神状態を、「彼の言う事をやらざるを得なかった」(288)と振り返る。

男性人物達は他人には警告するのに、自分の身体と精神の関係には気付かない。又、男性人物達の欲求の種類が少なく、大部分が睡眠と食欲である事により、リサとの対比において、本能とも身体欲求とも呼べる曖昧さが取り除かれている。つまりリサと彼らの違いは身体と精神の一体感の有無である。ストライキ開始後のジムとマックが食事に対して事務的である事は前章で述べたが、それは身体欲求充足に精神性を付加しなくなったということであり、欲求充足における身体と精神の一体感の喪失を意味する。これが授乳の会話を解釈した中でリサと対極にあった「社会生活を送る人間」の態度であることからも、男性人物とリサの対比は意図的である可能性が高い。欲求又は身体に関する叙述の群衆・男性人物・リサの三者間での書き分けは、「社会生活を送る人間」である男性人物に比してリサの社会的側面が小さい事を強調する目的ではないだろうか。何故ならリサは集団に加担しないだけでなく、他者からの影響や家族への愛着を出来る限り弱められてもいるからである（本稿３章参照)。群衆として扱われる労働者は人物に含まれないので、書き分けの目的は結局、社会的存在か否かという男性人物と女性人物リサのストライキでの立場の違いへの比喩だろう。

作者によるリサと男性人物の間の明確な区別は、リサに人間らしさというべき複雑さが加えられていないことにも表れてい

る。ここでいう複雑さとは、人格が矛盾や葛藤を含むことを指す。女性に関する作者の記述は、現実の女性を生殖と子育て機能に価値を置くばかりの存在だと認識していた節を示し、それが深みのない女性人物を作り出した元にあることは否めない。しかし少なくとも *Dubious* のリサについて言えば、複雑さの欠如は身体に関する叙述が男性人物と書き分けられているのと同じ効果、社会的存在でないことを強調する効果を狙って意図されたものではないか。

これについて Werlock の考えを参考にしたい。Werlock は、カリフォルニアの移住労働者は民族が混じり合っているという事実がスタインベックの小説で無視され、白人だけが用いられるのは主題をややこしくしない為だという Benson and Loftis の推論を紹介している。そして、主題を明確にするという意図が、*Dubious* のジムとマックが実在の女性をモデルとしながら作中で男性にされた事にも当てはまると述べる(48)。加えて、野営地には数多くの女性が存在するが、ストライキの活動に参加しない。この時、女性の排除によって人というものは基本的に男性の形をとっており、女性人物は男性人物と一線を画す存在だということになる。Benson and Loftis の推論は女性人物の性格が複雑さを欠く説明にもなる。だから、この小説の女性人物リサは象徴的役割を演じ、男性人物の活動や感情の叙述に付随して補足する存在だと推測できる。

仮にこの考えの通り、リサの性格における複雑さの欠如が社会的存在でない事を強調する為だとする。ならば男性人物は社会的存在であるが故に自己の内部に矛盾や葛藤を抱えている筈である。そこで次章は彼らの矛盾や葛藤に焦点を当てることから始めよう。

３．「在るべき二重性」に対する比喩

作者は *Dubious* の創作の意図について次のように記す。

ある果樹園に起きた小さいストライキを、ぼくは人間の自分自身との永遠の激しい戦いの象徴に見立ててみた。[. . .] だが、人間は自分の内部にあるなにかを憎むものでね、人は自然のなかにある障害はことごとく打ち破ってきたのに、自分自身だけには勝てない。[. . .] この自己憎悪を僕は書いた。自己愛としっかり手を携えているこの自己憎悪をね。（『書簡集』82）

自分自身との戦いや自己憎悪は、内的葛藤と言い換えられる。また、作者が社会や集団における人間（集団も個人も）の有り様に強い興味を抱いていたことは、数々の書簡やエッセイの内容から明白であり、その為、作者が葛藤の由来を社会に身を置くことに設定したとしても至極自然である。つまり、この作品の主題が社会における個人の葛藤に置かれていても不思議でなく、実際そのような葛藤を持つ男性人物が *Dubious* には複数見られる。始めにマックの葛藤を見てみよう。

野営地を提供した小農主アンダーソンの納屋は、対抗勢力に焼き払われる。その時のマックの言葉は、党員としての彼の生き様を表す。「たまたま彼が、皆の為に犠牲になっただけだ。集団が丸ごと虐殺者の家から逃げ出そうとするなら、必ず誰かが潰されなければならない。我々は一人の人間の苦痛なんて考えていられない。これは必要な事だ」(207)。これを聞いたバートンは、労働者全体の生活向上という大きな目的の為には不幸になる者が出ても気の毒に思わないマックは「残酷」（“cruelty” (212)）だと非難する。確かにマックは、人間でさえも目的の為の手段であるように度々語り、一見無慈悲である。けれども大勢の幸福の為に生み出される不幸という矛盾を掻き消すかのように、利益にならない仕事を自分は危険に身を晒してやっているのだと、マックは同じ位何度も繰り返す。この自己犠牲こそが矛盾に対する彼の言い訳であり、同時に誇りである。だから

彼は「何の危険も無しに」(172)ジョイを射殺した自警団の人間を、「世の中で最低の野郎だ」(172)と軽蔑するのだ。幸福の為の不幸という論理の矛盾を帳消しにする誇りが、党活動員としてのマックを支える。それでも彼には常に苦悩が付き纏う。「なぜ我々はこんなことをせねばならないのか」(161)。だからマックはまるで自分に言い聞かせるように繰り返し自尊心を奮い立たせ、自らを保っているのである。

Dubious には時に迷い葛藤しながら生きる人物が他にもおり、彼らも自分の信念に誇りを持つことによって社会的立場を維持している。例えば小地主アンダーソンは堅実であることを誇りに思い、朝から晩まで働いて地所を守り続けてきた。彼はマックに説得されて一旦は農業者連盟を裏切りストライキの為に土地を提供するが、納屋を焼かれた後、彼らに出て行くように告げる。彼は、守ってくれるとマックが「約束」(36)したのに息子アルがリンチに遭い、納屋が燃やされたとマックを責める。最終的には堅実さという彼の信念が、彼に再び元の立場に戻ることを決めさせたのだと、約束という言葉が示している。

社会的立場を個人的信条により支える彼らの姿は、作者の言葉に重なる。「人間は二重の（二面性を持つ）存在だと思う。つまり集団を成す動物であると同時に、個人でもある。そして思うに、まず集団での自分を確立して、それから首尾よく個人になることができる。」（“...I believe that man is a double thing—a group animal and at the same time an individual. And it occurs to me that he cannot successfully be the second until he has fulfilled the first.”(Steinbeck, “Some Thought” 22)）集団への所属は社会的立場の獲得を意味し[3]、個人とは信念や感情などの人間的なものの保持を意味すると解釈できる。社会的立場が精神的支えに先立つとは、人間が第一に社会的立

[3] 作者の使う集団という言葉は日本語では「社会」と敷衍せねば解釈しにくい場合があり、二つの意味が混雑すると本稿では考える。

場を基盤にして生きる存在だということである。このような作者の意識は、ダンが迎えた人生の終わりに強く表れている。

老林檎摘みダンは木こりだった頃、労働に独自の意味を見出し、以来それを支えに、自らを養う労働者であることに誇りを持ってきた。労働争議という抵抗をやめ、甘んじて搾取される労働者であり続けてきた。しかし彼は梯子から落ちて寝たきりになり、労働者の誇りに頼って生きることが不可能になる。彼は自分の事故が契機となってストライキが始まったことを新たな誇りに、労働者たちの指導者として生きようとする。そして指導者になることが叶わないと悟った時、今まで信じてきたものに立ち戻り、生きる努力をやめ、木こりだった頃の思い出を胸に死んでいくことを選択する。労働の尊さを心の支えに生きてきたダンは労働者という立場を失った今、生きる道を失った。彼の誇りは労働者という社会的立場無しには成り立たない。ここに、社会参加を基盤にして生きる人間という作者の考えが表れている。

しかし作者は人間性よりも社会参加に人間の存在価値を見出している訳ではなく、前述の言葉は、個人的な感情や信念を持って初めて人間として完全な形になるという主張でもある。両方が必要なのである。それは二重の存在であることを拒否して生きる二人の人物、ジムとバートンの破滅によって主張されている。

そもそも絶望による「死んだような気持から生き返る」為に党員になったジムにとっては集団参加自体が生きる目的で、Peter Lisca の言葉を借りるならば彼は「一方[a group animal]の極端を選んだ人物」である(75)。ジムは物語が進むにつれて、葛藤を打ち消す為のマックの教えをそのまま口にし、感情を押し殺すのではなく感情を無用のように言うようになる。「同情も恐怖と同じ位いけないものだ」(280)というジムに対して、マックは答える。「お前は正しいよ。狂気を相手に戦う為には冷静な

思考が必要だと、そんな事は全部知っている。でも本当はそれは、全知全能の神のことだ、ジム、人間ではない」(280)。マックの返答は感情という個人的要素の欠如を嘆いており、作者の考えに合致する。個人の心を覆い隠して党員の仕事をするマックと、心を必要とせず社会参加だけを目的として生きるジムは、物語の終盤で互いの違いに気付いて言い争う。マックは党員としてのジムの将来性を認め、彼を安全に逃がそうとする。しかしジムは「お前に逃げてほしいんだ、ジム」(121)という言葉に表れたマックの愛情を捉え、「時々あなたが党の為でなく、自分の為に私を守っている気がする」(343)と言って怒る。マックの行為が実際に党の為になっても、それが同時に愛情というマックの個人的感情を満足させるならばジムは疑いを挿まずにいられない。人間が二重の存在である事を理解できない彼は、混乱を隠せずマックに訴える。「あなたが言ったことじゃないですか」(343)。

小説の結末でマックは対抗勢力に殺されたジムの死体を利用して、「同志諸君！この者は自分の為には何も求めなかった―」(343)と叫ぶ。この台詞は、マックの信念である自己犠牲を表現している。冷徹な党員としてジムの死体を目的の為の道具として使うのは、ジムに愛情を持つ者として心苦しい。だから彼は、自らの心の支えを叫ぶのである。苦悩のあまり手摺を強く握るマックの指は、関節が白くなっている。この最終の場面で作者は、ジムが理解できないであろう人間の二面性を強く打ち出している。作者からジムへの辛辣な皮肉であり、人間の片面だけで満足しようとする生き方の虚しさを読者に伝えている。

バートンはジムとは反対の[individual]極端にある。彼もジムと同様人間の二面性を受け入れられず、マックが党員であり続ける為に感情を押し殺すことを理解できない。マックはテントの中でジョイの棺を前にして、集団の為に個人的感情を捨てるべきことを説き(210)死体さえも利用せねばならないと述べた

後、「彼は自らの為には何も求めなかった」(210)と語り始める。マックは感情を露わにした事を恥じて自分はジョイに話しかけたのだと言い訳するが、彼の言葉は彼の言い訳兼誇りである自己犠牲を語っており、実は死体を利用することに気が咎めていると分かる。しかしバートンは冷笑し、「あなたは今まで私が出会った中で最も奇妙な混合物だよ。残酷さと主婦みたいな感情[. . .] が混ざっているとは」(212)と言う。彼にはマックの二面性が奇妙にしか見えず、理解できない。

また、バートンは集団の目的に加担しないと決め込んで、集団の一員であることを感情の上で拒否する。彼がストライキの野営地の衛生管理の役を買って出たのは大義（“cause”(149)）の為でなく、人間の活動の全体像を「見る(知る)」（“see”(149)）為だという。しかし作者の考えでは、人は集団参加を達成する迄は個人としてうまく生きる事はできない。そこで作者は自分の考えの正しさを主張する為、バートンにある試みをさせて失敗させる。バートンは集団の中に自分を見出す代わりに、博愛という個人的思想によって他人との繋がりを持とうとする。代替品の提案である。「多分私はただ、彼らは人間であって動物ではないと信じているのだろうね。 [. . .] 私は人を助ける技術を持っているから、助けを必要とする人がいれば助けるだけだ。あまり深く考えていないが」(206)。この言葉によれば、彼の試みは無意識の裡に行われている。そのような試みの中ジムがバートンに向かって、活動中に撃たれた自分の腕のことを「怪我をするのは良い事のように思える」(206)と話す。集団との一体感を持つ幸福を目の当たりにしたバートンは、嫉妬する自分を感じたのだろう。「私は以前程あなたを羨ましくは思わないよ、ジム。だって私はあなたと同じ位人間を愛しているのだからね、方法は同じではないけれど」(206)と、嫉妬する必要は無いと言葉にして自分を安心させようとする。バートンは、博愛の精神によって自分もジムと同じ位他者との繋がりを有しているのだ

と確信しようとして更に会話を続ける。

「ああいうのって、分かるかな、先生。あんな感じ、軍隊が幾つも自分の中に行進して入り込んでくるような感じだよ。それで自分が軍隊を取り込むんだ。」
「ああ、そのようなものは分かるよ。特に彼らが何か愚かな事をしでかした時とか、人が失敗して命を落とした時とかね。そうとも、私には分かるよ、ジム、かなり頻繁に。」(206)

バートンの台詞は、博愛が同情という形をとって他人に共感する時、それは他人との一体感にほかならないという意味である。しかしこう言ってみても満足感を得られず（“unhappy”(259)）、やがて何もかも無意味（“meaningless”(258)）に思えてきたバートンは気まぐれにリサに「君の解決法を教えてくれ」(258)と尋ねる。彼は、牛を飼いたいなどという的を射ない返答に顔を逸らす。けれど、まるで精神性を伴って身体欲求充足の幸福を享受するリサに触発されるかのように、彼は自分が不幸なのは他人の肉体を精神から切り離して扱ってきたせいではないかと考えてみる。医者である彼は戦地で「まるで木ででもあるかのように負傷者を次々扱」ってきた(262)。そして今も野営地で「聴診器を通して人の心音を聞いているだけ」(262)である。精神的な一体感がどうしても得られない。とうとうバートンはマックに「あなたは空気を通して人の心音を聞いている」と、集団参加による他人との繋がりに白旗を揚げる。そして彼は失踪する。この場面で、リサの発言を契機にしたバートンの思考の変化は、本稿１・２章で明らかにしたリサと男性人物の対比を前提として初めて意味を成す。精神と身体による二重性を認めてこなかった事を反省するバートンの発言は、集団参加と個人的信条による二重性の拒否

は無理だったと気付く彼の諦めと重なっており、更にこの後、彼の不摂生を指摘するマックの発言が、社会参加の話と比喩の話が混じり合った会話の余韻となっている。従って、身体と精神の一体感が、集団と個人という二重性と二要素間の密接な関連への比喩であることが明らかである。リサは身体・精神の二重性を保有する唯一の存在だからこそ、集団・個人の二重性を拒否したバートンとジムに駄目出しをする事が出来るのである。そして集団・個人の二重性が在るべきだと示す為に、比喩の次元で二重性を持つリサは幸福な存在なのである。

バートンが答えを模索する場面で、リサは啓示を与える幸福の象徴として登場する。一方のリサとジムの関係では、聖母マリアと懺悔者という役割がよりはっきりしている。

その根拠の一つはジムの動きに見出せる、宗教から宗教への移動の図である。ジムは母親が死んだ時の様子と自分の気持ちを、「私に口をきかず、私を見るだけだった。大変傷つき、司祭を求めもしなかった。あの夜、何かが私から燃え尽きたようだ」(337)と話す。母親の様子は、入党面接で「死んでいるように感じる」と言っていたジム自身を思わせる。死の床にあって絶望的な母親を見てしまったジムは、決して同じ所に辿り着きたくない。それで彼は生きた実感を取り戻す為に党員の道をひた走ることにした。党員の役割を盲信するジムを見てバートンは「純粋に宗教的な恍惚感だ」(260)と評するが、母親を救えなかったキリスト教の代替物としてジムが見つけた生き方にふさわしい呼び名である。これがキリスト教から共産主義への、宗教変更の図である。ジムにはキリスト教を捨てた罪がある。また、純粋な集団人間として人間的な感情を失って突き進むジムは宗教上好ましくない。宗教の変更と、人間性の放棄。これが、一つ目の根拠である。

二つ目の根拠は、聖家族の配役にはジムよりも他に適任者がいる事である。ジムとリサの関係を指摘するにあたってバート

ンの発言を重視する批評家も多い。バートンの発言には、「ファランクス論」という文章を発表するなど集団理論に興味を持っていた作者の考えが出ているからである。その為バートンの「これは、まるで聖家族のようだ」(246)という台詞を捉え、リサ母子とジムを聖家族に位置付ける考えが優勢である。しかし一方で、大勢の為の自己犠牲の意識を持つ共産党員というジムの立場がキリストを連想させるという考えも度々主張され、この二つは食い違う。実際批評において見出した複数のイメージが両立し得ないことはよくあるが、しかし Fontenrose はミルトンの『失楽園』との共通点を見出す論文の中で、共通点はあくまでも原則であって、全てが呼応すると考える必要はないと述べている(46)。少なくとも“man is a double thing”による葛藤を小説の主張と考える場合、ジムは聖家族の一員ではない。集団参加についてはバートンの生き方は作者の考えに沿わないので、ここでバートンの意見を重視する必要は小さい。バートンが「聖家族のようだ」と言う時、確かにリサ母子とジムは並んでマットレスに座っているが、リサの傍らには夫ジョウイも立っている。ここで、バートンがテントに入って来る直前の夫婦の会話に注目したい。リサはジムと二人きりで居た事を夫に弁解する。それに対する夫ジョウイの言葉は、妻の潔白を信じるヨセフを思わせてあまりある。「僕はいつも考えるのだが、もし女を信じることが出来ないのならば、その女を見張ろうと思っても無駄なことなのだよ。浮気者は浮気者だ。リサは絶対に違う。だから僕は、彼女をそんな風に扱う必要を感じたことは無い」(246)。従って、この場面で聖家族はリサ母子とジョウイである。

以上二つの根拠を下地として、殺される直前に交わされるジムとリサの最後の会話は死の直前の懺悔を彷彿とさせる。リサは、テントの中にジムを見つけて入って来る。

「ここに来て座ろうと思って。好きなの―ただここに居るこ

とが。」

ジムは微笑んだ。「君は僕が好きだよね、リサ。」

「ええ。」

「僕も君が好きなんだよ、リサ。」(344)

両者の性的傾向を考えると彼らの「好き」(“like”)の意味は極めて精神的で信仰心に似る。リサが象徴する聖母は神の存在を前提とするので、ジムの目前へのリサの出現と「好き」という言葉は、神が傍にいる事と神の愛を意味する。感情を捨てるという絶望的な生き方をするジムが、殺される直前、最後に懺悔者として神に愛を告げる場面である。

このようにリサは、作者の考えに背いた二人の人物の破滅の直前、比喩としての性格を持つ幸福な聖母の象徴として現れる。ジムには死の直前に憐れみを見せる様に懺悔の機会を与え、バートンには比喩的な次元で間違いに気付かせる。しかしリサの役割は象徴に過ぎず、ジムとバートンが破滅しても、それがリサの価値観を肯定するものではない。何故なら、集団参加をしないリサは作者の言葉が定義する人間に当たらないからである。彼女は欲求に関する叙述によって比喩の次元で性格を与えられたに過ぎず、本質的には無性格、あるいは主題の観点から見て無性格だと言わざるを得ない。作者はリサをひたすら保護して、周りから影響を受けない象徴的存在に仕立てている。彼女は労働者達の指導者ロンドンの義理の娘として庇護のもとにある。立ち退きか戦いか、ストライキの最終的な決断が間近に迫った時、ロンドンはジョウイとリサを避難させることを考える。彼はまた、ストライキの戦略を話し合う際、彼女を度々テントから追い出す。更にリサは、夫や子供に対して一種個人主義的な淡白な姿勢を持つ。出産の場面に産みの喜びは無く、リサの身体の苦しみに焦点が当てられ、また、彼女はジョウイよりもディックの方が男性として好ましいと憚らずに語る。彼女は夫や

子供への愛情は示すが同調せず、妻や母親の役割が強調されない。つまり集団に参加しないだけでなく家族との関係も限界まで弱められ、リサは社会から隔離され守られた特別な存在として原始的なマリアを体現している。

リサの原始性はあるいは聖母と同時にエデンの人間たち、アダムとイブを表す事も可能である。主題を明確にする為に女性をストライキから排除した *Dubious* では、女性人物もまた性別を無くしているという考え方もできるからである。葛藤も無く素朴な幸福の中に生きるリサは、地上の人間を離れた存在である。そして一度も泣き声を上げない彼女の不気味な赤ん坊は、実現しない希望を表すだろう。黙りこくった赤ん坊は、黙って動かぬ聖母子像のキリストのようでもあり、人間の手に届かないエデンの幸福のようでもある。人間とは社会にあり、マックのように葛藤を抱えながら立場と心を守ろうと必死になって生き、決して楽園に安住する事を許されない。しかしそれは社会的側面を強く否定されたリサには縁のない話である。「赤ん坊はどうだ」と尋ねるマックに、リサは答える。まるで、彼らに叶わぬ希望の事など自分には関係無いというように彼女は答える。

> 「すごくいい感じよ。」と、彼女は囁いた。「全然泣かないの。」(199)

結び

In Dubious Battle に登場する女性人物リサは素朴な幸福の中に生き、聖母を象徴する。その性格自体は作者が格別伝えたかったものでないかもしれない。しかしそれは他の人物達との対比の上に成り立ち、更にその対比を前提として、彼女は男性人物達に対する作者の意見を代弁している。

Dubious の創作についての作者の説明からも、リサは重要な位置にあると分かる。作者は手紙に「それ[*Dubious*]は三層を成

す。表面的な話、集団心理の構造、そして叙述からではなく構造からしか到達することのできない哲学的結論である」と記す。この三層を Louis Owens はそれぞれ、「ストライキの話」、「集団理論研究」、「人間が何かに傾倒する必要」であると解釈し、作者の *Dubious* における中心的関心事は傾倒というテーマに関係があると主張する(98)。本稿第 3 章で扱った男性人物達による集団参加の方法のヴァリエーションは、集団の大義への傾倒の仕方に他ならず、Owens の解釈に頼れば *Dubious* の哲学的結論である。本稿は、集団参加についての作者の考え―“man is a double thing―a group animal and at the same time an individual”、あるいはそれ故の葛藤―の主張にリサが一役買っていると明らかにしたので、結局リサはこの小説の最も大きなメッセージに貢献していることになる。

また、作者は執筆に際して次のように気を付けたという。「ぼくはひたすら記録する意識になろうとした。一切判断せず、ただ事態を筆記することに徹したのだ」(『書簡集』82)。これは Lisca 始め多くの批評家が認めるところであり、Fontenrose は次のように評価する。「彼は他のどの小説よりも完璧に主観的叙述を避けることに成功し、この小説では我々はあらゆることを行為と会話からのみ知ることができる」(43)。思うに、主観的叙述を避けようとしたために、作者は場面の切り替えや出来ごとの順序つまり構成にこそ意図を込めざるを得なかったのだろう。その結果、リサは状況に呼応するような発言や出没によって主題を補助する役割を果たしているのである。

引用・参考文献

Bernstein, Irving. “Americans in Depression and War.” *A History of the American Worker*. Ed. Richard B. Morris. Princeton, N.J.: Princeton UP, 1983. 151-185.

Fontenrose, Joseph. *John Steinbeck; an Introduction and Interpretation*. New York: Barnes & Noble, 1963.

French, Warren. Introduction. *In Dubious Battle*. By John Steinbeck. New York: Penguin Books, 1992. vii-xxix.

Lisca, Peter. "Escape and Commitment: Two Poles of the Steinbeck Hero." *Steinbeck: the Man and His Work.* Ed. Richard Astro and Tetsumaro Hayashi. Corvallis: Oregon State UP, 1971. 75-88.

Owens, Louis. *John Steinbeck's Re-vision of America*. Ahtens: U of Georgia P, 1985.

Steinbeck, John. *In Dubious Battle*. Ed. Warren French. New York: Penguin Books, 1992.

---. "Some Thought on Juvenile Deliquency." Editorial. *The Saturday Review* 28 (1955): 22.

Werlock, Abby H. P. "Looking at Lisa—The Function of the Feminine in Steinbeck's *In Dubious Battle.*" *John Steinbeck: the Years of Greatness, 1936-1939*. Ed. Tetsumaro Hayashi. Introd. John H. Timmerman. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1993. 46-63.

スタインベック，ジョン，ラン・A・ジョン，ロバート・ウォルステン.『スタインベック書簡集—手紙が語る人生—』浅野敏夫・佐川和茂訳．大阪：大阪教育図書株式会社，1996.

ハヤシ, テツマロ編. 山下光昭訳.『スタインベックの女性像』東京：旺史社，1991.